





テストの採点の為、夜遅くまで学校に残っていたイオは
帰り道でならず者たちに因縁をつけられ、彼らのアジトに強引に連れ込まれてしまう。

どんなに諭しても、彼らは生徒たちの様に聞き分けが良い訳がなく
イオは力づくで犯されようとしていた。

「んじゃ、イクぜえ…」

「やだあつ…おちんちん、挿れちゃダメえ…！」

@ichio_x



ずぶ じゅぶっ にゅぶ ずりゅりゅッ

「ううっ うあ……やだあ……やだあ……！」

「ほおら だんだんヌルヌルになってきた」
「姉ちゃんも気持ち良くなってきたんじゃないか？」

「ならな…いッ…こんな…酷いことで…うあ…」

愛液の分泌で滑りは良くなっていたが
男のペニスのサイズでは快樂など僅かなもので
ただ痛みと苦しみだけしかイオには感じられなかった。

@ichio_x



じゅっぽ じゅっぷ にゅっぷ じゅっぽ!

心では拒絶しても、体は自分を守るために本能的に濡れてしまうもの。
この反応に喜んで男は嬉々として更に腰を激しく振り続ける。

「おほっ! もうだいぶ良い感じじゃねえか! こりやたまらんわ!」

「あうっ…うう…っ わた 私…ああ…ツ」

「ああ? なんだよ? どした?」

「ごめんな…さい…ツ」

「何謝ってるんだあ?」

「へへっ こっちは最高にハッピーだぞ? 気にすんなって!」

「ごめんなさい…ごめんなさい…ツ」

イオの謝罪の意味など男には分かるわけがなかった。

@ichio_x



「お おおっ!…来た来た…出るぜえ…ツ イクぜえ…ツ!」

息を荒げる男の様子にイオが我に返る。

「や…だ ダメよ…?」

「悪いな姉ちゃん オレはよお…中出し以外はしねえんだわ」

「だ ダメエ…ツ! 赤ちゃん…出来ちゃうからツ!」

「そうだな…うう…出来ちゃうかもしれねえなあ…」

「お願い…それだけは…やめてえ…ツ!!」

@ichio_x